

レトリック（言語表現技術論）の実践教育

● 村 越 行 雄

1 はじめに

最近の話題として注目されているものの1つに、日本の社会におけるコミュニケーションの活発化・多様化とそれに対する日本の若者の能力不足がある。コミュニケーション不足・障害・不全という問題の深刻化を食い止める為に、またその結果として人間関係の不足・障害・不全を回避する上でも、若者の日本語表現能力そして日本語コミュニケーション能力の改善と向上は緊急課題になっている。そこで、今回は跡見学園女子大学文学部のプロゼミⅡの演習でレトリックの実践教育を実施した。言語表現技術を実践的に身に付けることで、表現能力の改善・向上、さらにはコミュニケーション能力の改善・向上に直接結びつくことを実証することが目的であった。では、2010年度秋学期開講のプロゼミⅡの実践教育について、具体的データに基づく実証的研究を行っていくことにする。

2 レトリック実践教育の概要

2010年度秋学期プロゼミⅡの14回の授業（10月1日～1月21日）の内、最初の2回は、レトリックの概要と今後の授業の運営方法について説明した。そして、3回目以降、12回に渡って、実践訓練を実施した。そこで、レトリック実践教育の概要から始めることにする。

レトリックと言っても、実に多くの意味で使用されているのが現状で、その原因の1つに、レトリック自体が歴史的な過程で大きく内容を変化させ、しかもそれ以前のを消滅させることなく、持続させながら、進んできたことが挙げられる。今回のレトリック実践教育は、あくまでも古典レトリックの弁論術を現代的にアレンジして言語表現技術の実践的習得を目指したものである。そこで、学生には訓練開始の前に、古典レトリックの内容の理解、その現代的なアレンジの果たす役割、学生個人への言語表現技術の改善・向上の関わりなど、いくつかの重要なことの説明が必要不可欠であり、そのことから始めていった。

古典レトリックは、紀元前5・6世紀の古代ギリシャ時代から古代ローマ時代にかけて、説得性を主目的とする弁論術として展開されたものである。代表的な人物としては、アリストテレス、キケロ、クインティリアヌスなどが挙げられ、弁論術の理論と実践が示されている。そして、集約的に言えば、古典レトリック（弁論術）が発想・配置・修辞・記憶・発表の5部門から構成される体系としてあると解釈できるものである。簡単に言えば、何を話題にするのか、どのような順序で進めていくのか、具体的にどのような言語表現を使用するのか、記憶はどうすれば可能になるのか、発表の仕方はどうすればいいのか、と言ったことに関するものである。そうしたことは、人前に立って、口頭で発表する技術に関するもので、現在のプレゼンと言われているものと類似した状況を想定することができるものである。少数であれ（たとえ、1人であれ）、多数であれ、人前に立って発表すること、特に相手に自分のことを伝え、説得することは、日常的に頻繁に行われていることであり、その技術の必要性和重要性は誰もしが認めていることで、その技術の獲得は急務であると感じられている。しかも、単に相手を説得するのではなく、相手の納得

に基づいて初めて成立するという説得の行為は、簡単に遂行できるものではなく、それだけにそれに関連する技術の獲得は単純には行かないものと言える。あくまでも知識と技術の両面の獲得が必要になってくる。

古典レトリックの5部門を今回の言語表現技術獲得の実践教育に当てはめ、次のような手順で実施することにした。

発想：発表するテーマを自ら選択し、それに関する情報を様々な媒体を通して収集する。

配置：収集された情報をテーマの効率的な発表と伝達に適した形で組み立て、全体の構成を作成する。

修辞：作成された全体の構成に沿って、自分の主張を伝達し、聴衆が理解し、納得できるように、具体的に言語表現を選択し、工夫する。それをまとめて、発表用原稿を作成する。

記憶：作成された発表用原稿を発表開始前までにできる限り記憶し、単に原稿を読むのではなく、聴衆の反応を見ながら対応できるようにする。発表は、聴衆全員が見える教壇に一人立って、発表者－聴衆という緊張関係の中で実施させる。

発表：発表する内容だけでなく、その形式にも注目し、言語的手段のみならず、非言語的手段、さらに可能な道具を可能な限り使用して、聴衆を説得するように工夫をする。

以上の方法と順番で、繰り返し訓練することで、単に頭で記憶する知識だけでなく、身体を使って体得する技術としても獲得できるようにした。

今回重視したことは、発表する内容に注目させるだけでなく、発表の仕方にも注目させ、その仕方という形式が発表・コミュニケーション・人間関係にとって、いかに重要であるかを理解させることであった。大袈裟に言えば、あらゆる手段を使って、聴衆を説得することが必要で、聴衆全員から見える教壇に一人立つ発表者は、まさに全身を使って表現するしかない状況に置かれる。こうした訓練によって、慣れが生じ、聴衆をじっくり見れる余裕、また自分を見直す余裕などが生まれ、ある種の精神的な冷静さが経験できるようになる。

3 実践教育の実施方法

古典レトリックと言語表現技術の関係に関する概要を説明し、それに続いて、添付資料1を全員に配布し、授業で行われる実践教育の具体的な実施の方法を説明した。

今回訓練を実施したクラスは、跡見学園女子大学文学部コミュニケーション文化学科1年生が対象で、履修登録者が38名で、実質参加者は37名（1名は第1回目の授業に出席しただけで、あとは全て欠席した学生である）であった。第3回目の授業の10月15日から1月21日までの間で、12回の授業日を訓練のために使用した。

具体的な実施方法に関してであるが、学生に実際に配布した添付資料1で明確になっていると思われるので、ここでは繰り返しを避けるために、重要な点だけを少し詳しく説明することにする。

テーマの選択と情報収集については、教員側からテーマを与えると効果があまりでないという過去の経験により、学生自ら自由に選択させることで、主体的で、積極的な関わりを促すことが目的であり、またテーマの選択に何らかの制約を与えると効果が限定的になってしまう可能性があるため、全く自由にした。そして、情報収集のための文献についても、一切の条件を付けずに、自由にさせた。その理由の1つに、大学に入学したばかりの新生に教員側から条件を付けると過重な負担になり、マイナス効果になり、むしろ学生自らが自由に選択したテーマに沿って情報収集する際、どのような文献がテーマの内容にとって適切なのか、聴衆を説得するには、どのよ

うな文献がより効果があるのか、その他のことを自ら考え、繰り返し訓練をする過程で、自ら最適な文献が何かを探り出し、見つけ出すことが重要になるからである。従って、内容的には、専門的で、学術的なものから、マスコミなどの報道関係のもの、趣味的なもの、日常的なものまで、どれでも構わないことにし、情報収集についても、インターネット、本、雑誌、新聞など、どの媒体の形式でも自由で、著書全体でも、雑誌、新聞などの掲載論文・記事でも、1つのまとまりのあるものなら、全て構わないことにし、さらに文献内容の分野についても、専門研究、ニュース報道、文学、料理、絵画、マンガなど、全て構わないことにした。

使用文献から収集された情報については、全体の構成を作成する上で、発表内容の要旨と評価・コメントの基本的な構成にし、その中でさらに細部に渡る構成を工夫し、作成させた。それは、発表用原稿という形で、全体の構成を反映させるものにした。但し、1年生に最初から多くのものを求めすぎることは逆効果を生み出す危険性があるため、初回の発表では、要点などを書き移したレジュメでも、原稿をそのまま読むための読み原稿でも、いずれでも構わないことにし、2回目、3回目へと繰り返す中で、発表用原稿を完成させ、ただその原稿を読むのではなく、記憶して聴衆の反応に対応できるように指導した。ここで重要なことは、限られた制限時間内に効果的な発表ができるように発表用原稿を作成し、実際に説得力のある発表を行うことを訓練することである。今回は、発表時間を1人7分間にしたが、持ち時間が長すぎても、短すぎても、効率のよい訓練にはならず、受講者数と授業時間と発表回数から1人7分間とし、1回の授業時間90分で、10名が発表するようにした。なお、実際の授業では、各発表に対して、教員が発表に要した時間を公表し、簡単なコメントを付け、聴衆による評価の参考材料にさせた。

実際の発表では、聴衆を説得するために、可能な手段を可能な限り使用することになるが、その際、言語的手段は勿論のこと、非言語的手段や道具などの使用の意義を説明し、実践するように勧めた。例えば、非言語的手段としては、身体の動き、顔の動き、目の動きなど、非言語コミュニケーション論で言えば、動作学に関するもの、聴衆との空間的距離、教壇上での場所の移動など、近接学に関するもの、声の高低、速度、間の入れ方、感情移入など、音調学（あるいは、周辺言語、パラランゲージ）に関するもの、さらには服装、髪型、化粧などの外見によって第一印象を与えるものなど、対物学に関するものがある。そして、道具については、教室の設備の関係で、パソコンが使用できなかったため、それ以外の道具の使用となるが、実際には使用文献を持参したり、写真や資料のカラーコピーを見せたり、図表やキーワードを書いた紙を黒板に張り付けたり、黒板にチョークで書いたり、限られた範囲で道具を使用していた。ただ、パソコン不使用という条件は、必ずしも悪条件とは言えず、高度な機械を使用することで、それに依存してしまい、学生個人が持っている能力を引き出したり、伸ばすことができなくなる可能性があり、限定的な条件下で、自分なりの創意工夫で適切な道具を見つけ出すことも意味のあることである。別の言い方をすれば、パソコン、その他のハイテク機器が使用できない状況であっても、いかなる状況でもプレゼンができる能力を作り上げるとも考えられる。

各発表に対して、聞く側の聴衆にとって、ただ聞いているだけでは漠然と聞くだけで終始し、発表内容の明確な理解ができないままで済ましてしまう傾向があるので、聴衆全員に添付資料2と3の評価用紙を配布し、記入するようにさせた。添付資料2の方は、発表者氏名と発表タイトル、さらに総合評価と個別評価(6つの基準による評価)から成り、評価点は5点満点で付けさせた。なお、6つの基準による個別評価の点数の単なる合計が総合評価の点数になるとは限らないので、総合評価は個別評価に基づきながらも、必ずしも直接連動させる必要はなく、全体的な判断に基づいて評価するように指導した。その理由は単純で、6つの基準だけで全体像を理解するのは無

理であり、また人間が受ける印象・イメージは本人には意識的に把握されていなくとも、直感的にかなり正確に判断できることがあるからで、総合評価と個別評価を別の次元での判断で処理できるようにした。添付資料3は、発表内容の要旨と発表内容の評価・コメントから成り、毎授業10名の発表に対して、10名分として2枚配布した。ただ、時間的な制約もあり、学生は発表開始とほぼ同時に記入し始め、要旨、評価・コメント、評価点を発表終了後数分までに仕上げることになる。敢えて短時間で記入を要求したのは、短時間で内容理解と評価判断の訓練をすることで、より実践的な能力を獲得させるためである。つまり、12回の授業の中で毎回10名が発表するとして、単純計算すれば、120回の発表を聞き、それぞれに対して、要旨、評価・コメント、評価点を付けることになるわけで、各学生にとっては、かなりの量の訓練を体験できることになるからである。さらに大事なことは、そうした訓練が学生本人が発表する時に影響を与え、発表の仕方の改善・向上に強くつながっていくことである。ただ発表するだけで終始しても、またただ聞いているだけで済ませてしまっても、効果の面で弱く、両者をうまく関連付けることで、相乗効果的に発展させていくことができる。そして、当然のことであるが、授業中、学生は静かに、しかも真剣に聞いているので、授業の雰囲気が極めて良好であるという副産物が生まれてくる。教員が学生に静かに、真剣に聞くように注意しても、ただ聞いているだけでは、集中力が低下し、飽きてしまうことがよくあるが、別に注意しなくても、そのような環境を作ることで、自然に集中力を高め、静かに、真剣に聞くという雰囲気が副産物(あくまでも、それが目的ではないので)として得られることになる。

添付資料2は、教員が受け取り、学生の総合評価点と教員の評価点の合計(共に5点満点で、合計10点満点)で成績評価をするために使用され、添付資料3は、発表者に渡して、聴衆の反応と評価を知ること、発表者自らが自己評価し、さらには次回の発表への参考にさせるために使用される。前者の成績評価については、教員の一方的な評価よりは、学生も参加できる共同作業的な成績評価の方が、学生自身の積極的な関わりを引き出せ、満足感も感じさせられる利点がある。後者の要旨と評価・コメントの記入については、発表者が見るだけでなく、その後、教員が回収して見るという2重のチェックを通過することを学生は知っているので、ふざけたり、意地悪したり、未記入であったり、その他の不適切な行為をすることはなく、真剣に、まじめに書いており、それが訓練の効果的な遂行を可能にさせることになる。

発表終了後、発表者は聴衆からの添付資料3の評価用紙を受け取り、それに発表時に使用した発表用原稿に基づいて、レポートを作成し、教員に提出する。これで、一巡することになる。レポート作成を進展させ、正式のレポート(論文)作成へと結びつけていくための重要な段階として位置づけている。ただ単にレポートを作成させると言っても、簡単ではなく、特に新入生にとっては、全く見当のつかない、未知の世界のように感じられるもので、段階毎に進めていく必要がある。そこで、テーマを選択し、それに適した情報収集のために文献を探し、それに基づいて発表の全体の構成を考え、工夫をし、それを7分間の発表に合わせて発表用原稿を作成し、実際に発表した後、聴衆からの評価・コメントを参考にしながら、教員提出用の最終的なレポートを作成するという過程で、しかも3回繰り返すことで、段階を追って、レポート作成の手順がわかり、結果的に正式の論文作成というものにつながっていくことになる。論文作成で重要なことの1つに、例えば、学術雑誌などの投稿論文の紀要委員による査読・審査のように、第三者の目を通して評価を受けることがあり、それによって客観性が保たれるのであり、情報収集の際に、複数の文献を使用することで、偏りをなくし、客観性を保つと同様に、二重にも、三重にも、客観性の保持は論文としての価値を高める上で必要になってくるものである。

以上のように、古典レトリックの5部門を活用して、現代的にアレンジし、さらに授業を行った学生たちの置かれた環境に合わせてアレンジしたものである。勿論、本稿で、「古典レトリック」を敢えて持ち出す必要はないが、古代ギリシャ時代にすでに存在していた弁論術が現代でも通用する言語表現技術論であるという認識は、現代に活かしていく上で多くのヒントを与えてくれるという意味では、重要になってくるものである。

最後に、個別評価点について、触れることにする。以前に、評価の基準を明確にせずに、単なる5点満点での評価を行わせたことがあるが、学生側からの評価について、評価の仕方が曖昧で、どのように評価していいのかわからないとか、それぞれ個人が別の基準で意識的にも、無意識的にも、評価してしまうとか、評価点のばらつきがあり、客観的な評価とは言えないものになってしまった経験があり、それを改善するために、今回は6つの基準を挙げることにした。

個別評価点における基準として、使用文献の適切性、使用文献の内容の伝達性、発表の言語的表現性、発表の非言語的表現性、発表内容の要旨の完結性、発表内容のコメント・評価の妥当性の6つを挙げた。使用文献の適切性：学生が選択したテーマについて、内容的にどう評価できるのか？そして、テーマに関連する情報の収集のために使用された文献が適切なかどうか？内容の妥当性と文献の適切性は、発表のための初動段階における重要性（その後の段階を左右するものとして）を学生に認識させる目的がある。テーマをどのように選び、文献をいかに探すかということが、発表全体、さらには聴衆による評価を左右する程、影響力の大きいものであることを学生に把握させることが必要である。使用文献の内容の伝達性：テーマの内容が使用文献による情報で十分表現されているのか？聴衆に十分伝達されているのか？ここでは、発表者と聴衆の関係が評価されることになり、発表者自身がいくら理解していても、それだけでは何も始まらず、あくまでも聴衆に対していかに表現し、いかに伝達するかが重視される。発表には、必ず相手がいるもので、そのことを意識して全てを考えることを学生に認識させる目的がある。発表の言語的表現性：発表を効果のあるものにするためには、まず言語表現の良さが関係してくる。ただし、この場合の言語表現の良さは、文法的に正しい表現のことを言っているわけではなく、状況に適した表現のことである。ある状況で発表するということは、ある一定の条件の下で行うことを意味し、従って、例えば、若い女性を相手に、授業内の発表として、2010年という今の時点で、その他の条件下で、発表する場合、それらの条件を満たし、さらに説得するために必要な表現の仕方があるはずである。あるいは、例えば、テーマの内容（専門的なものから日常的なものまで）によって、それに適した言語表現があるはずである。そのような状況に適切な言語表現が、結果的に聴衆を説得する効果を得ることができるということを学生に認識させることが目的である。時には、厳格な言い方をしたり、ざっくばらんな言い方をしたり、親しげな言い方をしたり、簡潔な言い方をしたり、細部に渡る言い方をしたり、率直に言ったり、遠回しに言ったり、比喩を多用したり、様々な言い方があり、それらを有効に活用することが必要となる。発表の非言語的表現性：人前で発表する場合、言語を媒介にした表現・伝達だけで済む部分だけでなく、言語以外の部分も大きな役割を演じている。むしろ、最近の非言語コミュニケーション論に関連した研究では、日常会話において伝えられるメッセージは、言語的部分が10%以下で、非言語的部分が90%以上であるという調査結果が出ている程、非言語的要素が重視され、注目されている。また、実際の学生による評価は、かなりの部分が非言語的要素で占められているのが現実で、それだけに非言語的要素を発信と受信の両面から正確に把握することが重要になってくる。例えば、発表者が無意識に非言語的メッセージを発信してしまっているとか、聴衆が発表者の非言語的メッセージを間違えて解釈してしまっているとか、様々な誤解や勘違いが生じやすいだけに、注意が

必要となる。そのことを学生に自覚させることも大事である。発表内容の要旨の完結性：発表者が伝える要旨がよくまとまり、完結性があるのか、それともまとまりがなく、結局何を言いたいのかわからず、未完結のまま終わっているのか、その点の構成と組み立てを絶えず念頭に置くことが大切であることを学生に理解させることが目的である。特に、若い人は使用文献のあらすじをそのまま述べるだけで、ただ長く、まとまりがなく、何を言いたいのかが全く理解できないことがよくあるだけに、まとめる力と完結させる力を養成することが必要になってくる。そうした能力の育成は簡単ではないが、数多くの発表を聞いて、他人のまとめ方と完結の仕方を繰り返し体験することで、可能となるであろうし、多分それしか最良の方法はないのかもしれない。発表内容のコメント・評価の妥当性：発表者のコメント・評価に関しては、発表者側も、聴衆側も、何が妥当で、何が妥当でないかを判断するのは難しいものである。特に、新入生にとっては、簡単にできるものではない。従って、多くのものを期待することはできないが、数をこなして、慣れていくしかないとも言える。つまり、妥当かどうかを判断するには、多様な知識や経験を持ち、それらに基づく価値観を持っていることが必要になるが、それには時間の積み重ねという過程が大きな比重を占めることになる。ともかく、発表者としてコメント・評価を何度か行い、さらに聴衆として何度も他人のコメント・評価を聞くという場を提供するのが主目的となる。

4 実践教育の調査結果

発表の実践教育は、秋学期授業開始の10月1日から第3週目の10月15日から1月21日までの合計12回の授業日を利用して実施した。合計120回の発表となるが、欠席が17回分の発表で、追加分1回の発表となり、実質的には104回の発表の実施となった。欠席については、実際に授業に欠席したケースだけでなく、発表への準備不足、資料持参の忘れなどの理由で、授業には出席し、評価などの活動には参加したケースも含まれる。授業は、4時限目で、2時40分から4時10分までの90分の授業の中で行い、1人7分間の持ち時間で発表し、10名が発表した。発表の間は数分間を取り、その間に評価用紙の記入を終了させ、できなかった場合は、全ての発表終了後、時間を与えて完了させた。また、その場で、添付資料2を教員に、添付資料3を発表者に渡した。

学生自身が決めたタイトルは、以下に挙げる。

第1回目：10月15日

- (1) 欠席
- (2) 欠席
- (3) 「人づきあいに困らない方法」について
- (4) 「僕の神様」について
- (5) 「新しい大学と接続の在り方」
- (6) 雑誌と雑誌記者について
- (7) 「風のおもむくままに」について
- (8) 「自転車少年記—あの風の中に—」について
- (9) 理想が高い日本の女性
- (10) サプリミナル効果について

第2回目：10月22日

- (1) 「独りが怖い」について

- (2) 欠席
- (3) 熊さんの生態状態
- (4) 「モードの女王シャネルーココシャネルという生き方ー」について
- (5) 色とりどりの毎日
- (6) 品格を高める行い
- (7) 生命とは何か？
- (8) ディズニー経営の歴史
- (9) 欠席
- (10) 「翼をください」における日米関係

第3回目：11月5日

- (1) 「one piece イーストブルー編」について
- (2) 不機嫌と甘えの心理
- (3) チリの落盤事故について
- (4) ディズニーの素晴らしさについて
- (5) 欠席
- (6) 女子の世界の難しさ
- (7) ラブリーコンプレックス
- (8) 国際結婚
- (9) 妖怪はいるのか？
- (10) 金子みすずの世界観

第4回目：11月12日

- (1) 接客上手になるためには
- (2) 関東と関西
- (3) 情勢的な美しさ
- (4) 聞き上手になるには
- (5) 何かを始めるきっかけに
- (6) 中国版無断で電子化
- (7) 日本人のブランド志向
- (8) 信じるか信じないかはあなた次第
- (9) FLCL フリクリ
- (10) 語学の実体

第5回目：11月19日

- (1) 男女の違い
- (2) ディズニー音楽の魅力
- (3) 欠席
- (4) 欠席
- (5) 「僕が作家にしてしまった彼女」について
- (6) 食べ物による癒し

- (7) パーソナルカラーについて
- (8) 「絶対に報われない恋」について
- (9) ギャップは大切
- (10) 地球上で一番ハッピーな場所

第6回目：11月26日

- (1) スティーブ・ジョブス 神の交渉力
- (2) イクメンについて
- (3) カワイイの帝国
- (4) 欠席
- (5) 手からわかる性格
- (6) 本当の友情（漫画『ライフ』）について
- (7) 欠席
- (8) 欠席
- (9) 弓道について
- (10) ニートについて

第7回目：12月3日

- (1) 就職活動
- (2) 部活から得たもの
- (3) 日本景気とアルバイト
- (4) 魔法の世界
- (5) マンガと社会現象
- (6) 空想を形にする幸せ
- (7) 常連の事情
- (8) 欠席
- (9) ナルシストについて
- (10) 左右学への招待状

第8回目：12月10日

- (1) 深イイジブリ映画
- (2) コメントする力
- (3) ハリーポッターの素晴らしさ
- (4) Bump of Chicken（音楽バンド名）について
- (5) 携帯電話が手放せない
- (6) USJ（Universal Studio of Japan）について
- (7) アメーバピグ（インターネットサイト名）について
- (8) 睡眠と夢
- (9) 秩父夜祭について
- (10) 欠席

第9回目：12月17日

- (1) 人生は気持ちで変わる
- (2) 欠席
- (3) 欠席
- (4) 朝がつらい
- (5) 私の尊敬する人
- (6) 初版グリム童話
- (7) 韓国と日本のお正月について
- (8) ほっこり交流録
- (9) スピーチのすすめ
- (10) 性格

第10回目：12月24日

- (1) 少年の心
- (2) ツンデレの魅力
- (3) 乙女の恋
- (4) 競技ダンス
- (5) B級グルメ
- (6) 欠席
- (7) 欠席
- (8) 血液型と相性
- (9) 笑いの力
- (10) スラムダンクの魅力

追加 (11) 個人情報が出回っている

第11回目：1月14日

- (1) 伝わるもの
- (2) 就活
- (3) バレンタインについて
- (4) 癒し (ネコカフェ)
- (5) 裁判員制度
- (6) 命の大切さ
- (7) ネットの普及でビジネス
- (8) マンガに学ぶ生き方
- (9) クレヨンしんちゃんについて
- (10) 欠席

第12回目：1月21日

- (1) 宝塚
- (2) 肉食系男子のススメ
- (3) フィギュアスケートの魅力

- (4) 映画鑑賞
 - (5) 伊達直人運動
 - (6) 雑学
 - (7) 安くて可愛い
 - (8) 冬の風物詩
 - (9) ムック本について
 - (10) シェイクスピア
- (第10回目の追加⁽¹¹⁾)は、以前欠席した学生が申し出て、発表させたものである。)

発表実施率は、120回中104回で、87%となり、出席率の評価は別にして、100回以上の発表ができ、訓練としては十分な回数であると考えられる。というのは、発表は各学生3回となり、十分と言える回数ではないが、聴衆として聞く側から見れば、他人の発表を十分な回数聞けることになり、しかもただ漠然と聞いているのではなく、評価用紙2枚を記入することで、発表の仕方を疑似体験できるわけで、さらに自ら発表した後で、幾つもの他人の発表を聞き、疑似体験し、それを活かして2回目の発表をし、続けて何度か他人の発表を聞き、それから3回目の発表をするという過程で両者が互いに相乗関係になり、効果の向上が期待できるようになるからである。

上記のタイトルが示すように、発表内容はジャンル別に見ればかなり広範囲に広がり、そこから多くのことを読みとることは困難であるように思われる。勿論、全く自由に選択させた以上、広範囲に分散するのは当然のことと言えるが。専門的なものに関しては、全体的にはそれほど多くないが、例えば、新しい大学と接続の在り方、サブリミナル効果、睡眠と夢、シェイクスピアなどがあり、それなりの知的好奇心が新生児にあることを示しているし、真剣に、まじめに取り組んだものに関しては、僕の神様、生命とは何か、命の大切さなどがあり、生きることの意味を問いかけていることを示しており、報道メディアを通して話題になったものに関しては、品格を高める行い（品格という言葉が流行語になった）、チリの落盤事故（テレビで連日報道された）、中国版無断で電子化、スティーブ・ジョブス神の交渉力（アップル社の代表者で有名）、イクメン（育児に専念する男性が話題になった）、カワイイの帝国（カワイイという言葉が流行した）、アマーバピグ、伊達直人運動（マンガ「タイガーマスク」の登場人物である伊達直人の名前で寄付を行い、それに触発されて多くの人が寄付をした）などがあり、テレビなどのメディアを通して話題になったものに敏感に反応しており、メディアを通して得られる情報が与える影響力を示しており、学生にとっての関心事である就職に関しては、ニート、就職活動、日本の景気とアルバイト、就活、ネットの普及でビジネスなどがあり、勿論就職氷河期にいる学生にとっては、将来への仕事の不安を示しており、how to ものに関しては、人づきあいに困らない方法、接客上手、聞き上手、コメントする力、スピーチのすすめなどがあり、コミュニケーションについてのhow to 本がいかに浸透しているかを示しており、ディズニーものに関しては、ディズニー経営の歴史、ディズニーの素晴らしさ、ディズニー音楽の魅力があり、日本人におけるディズニーの影響力を示しており、その他、身の回りのこと、日々の生活のこと、部活のこと（弓道、部活から得たもの、競技ダンス）、趣味・娯楽のこと、などなどいろいろあり、上記のタイトルを簡単に目を通してだけでも、いくつもの傾向が見いだされる。

そして、今回の最も顕著な傾向がマンガに関するものである。マンガ本を取り上げたり、マンガの意味と現象を取り上げたり、扱い方は異なるが、マンガに関連したことが多かった。一言で言えば、現代日本社会の反映ということになるが、マンガは単なる娯楽の一部として副次的な位

置づけで片付けられない程に進化し、生活の一部としての表現手段、さらにはコミュニケーション手段という位置づけが与えられ、学生の中には、人生の指針と捉える者がいる程になっている。そうした傾向は今後さらに強まっていくのであろうが、マンガという内容によって、発表方法も影響されているのも特徴として挙げられる。例えば、マンガ本の登場人物、場面などのカラーコピーを多用して発表する形式で、それによって映像化された世界を提供していると言え、シェイクスピアのような戯曲や小説の発表が文字化された世界を提供しているとすれば、対照的な形式を示すものと言っているであろう。発表の内容が発表形式に影響を与え、時には規定するという関係は、他でも見られ、特に顕著だったのは、部活の発表の際、弓道では弓矢などの実物を持ってきて見せたり、競技ダンスでは実際の競技ダンスの写真を見せて、ステップを実践したりしたことである。

女子大生特有の興味の対象を表すものとして、理想が高い日本の女性、女子の世界の難しさ、国際結婚、情勢的な美しさ、日本人のブランド志向、男女の違い、絶対に報われない恋、空想を形にする幸せ、乙女の恋などのように、女性(女子、女、乙女)、結婚、美しさ、ブランド、恋、幸せといったキーワードが入っていることが挙げられる。もしそれに追加するとすれば、手からわかる性格、性格、血液型と相性といった占いとか性格判断、食べ物による癒し、B級グルメといった食べ物関係なども入るのかもしれない。

発表されたテーマの内容に関する分析はここまでとして、むしろ発表の内容と形式の間の相関関係の方が今回の訓練の目的にはより注意が向けられるべきものであろう。発表されるテーマの内容には、それに最適な発表の形式が存在するわけで、弱い意味での影響という関係か、それとも強い意味での規定という関係かは別にして、両者の間には相関関係があり、そうした関係が訓練を通して実現化されたことは、一つの成果であったと言える。それは、初回の発表では、非言語的手段や道具を使用する学生はほとんどいなかったが、2回目、3回目になるにつれて、非言語的手段や道具を使用する学生が増えてきたことから判断できる。勿論、他の学生に影響されてそうしたと言えるが、何をどうすればより効果的な発表ができるのかを考え、工夫した結果であることには間違いない。また、最近の若者の傾向であるが、言語的手段のみで発表し、聴衆を説得することよりも、言語以外の様々な手段を利用して発表することの方が得意であるとも言える。特に、新入生にとって、言語的手段のみで、思考力を十分発揮して、論理的に考え、組み立てていくことは困難であるし、前述した映像化された世界の方が文字化された世界よりも理解しやすいし、その分だけ利用しやすいものになっているのが事実であろう。そのことはともかくとして、一般論として、発表の形式としては、動画、写真、カラーコピー、図表などのように、映像化されたものは利用した方が理解しやすいし、また文字化にしても、口頭で言う(話し言葉)よりは、文章を黒板に板書したり、コピーして配布したり、パワーポイントで画面に映し出したりする方(書き言葉)が理解しやすいのであり、今回の訓練では、そうしたことを学生が実践したということになる。

結果的には、発表する立場だけでなく、聞く立場に立つことで、しかもかなりの回数繰り返すことで、訓練が効率よく遂行され、単独よりは遙かに大きな成果を得ることができたと評価できる。

発表の形式に関する状況をさらに検討すると、いくつかの注目点が挙げられる。それは、多くの人を前にして、壇上に上がって話すことに対する精神的な緊張感である。高校を卒業したばかりの女性がこうした状況で感じる緊張感は極めて大きく、それを乗り越えることが最初の一步となる。つまり、発表する以前の段階である。どのような方法で対応策あるいは解決策を実行する

かは、個々の現場で異なり、一様に押しつけることは逆効果であり、それぞれの現場に合った方法を取る必要がある。今回は、自由に活動できるような環境を作り出すために、前述したように、訓練の成果を効率よく達成するには様々な条件があるが、それらを最初から厳しく要求するのではなく、緩やかな要求から厳密な要求へと徐々に強化したことであり、その過程で学生を少しずつ慣れさせていくことであった。時々見られる方法としては、訓練の成果の達成に一直線に向かって、最初から一定の条件に厳密に従うようにし、その中で徐々に近づけていくような指導がある。その例として、警察や軍隊の訓練などが考えられる。極端なケースと思われるが、現実には頻繁に行われているケースで、例えば、学校の授業でも、ルールに従うように指導し、それに反する場合には、何らかの罰則的なものを課すなどして、最初から厳密さを強く要求し、成果達成を実現させていく方法はそれなりの意味は十分ある。しかし、主体的な関わりと自己努力による達成を目標に置く限り、それは逆効果になる。むしろ、緩和から厳密への移行過程で、量的緩和（要求する条件の数を少なくして、その後徐々に数を増やしていく）あるいは質的緩和（要求する条件の数は最初から変わらないが、従わせる程度を下げ、低いものから高いものへと上げていく）によって各学生が対応しやすいように、また順応しやすいようにして、主体的に関われるようにさせ、自分の力で達成できるようにさせていくことが重要になってくる。

具体例を少し挙げると、まず第一が雰囲気づくりである。教員と学生や学生同士がいつでも自由に何でも話せるような場を作り出すことが必要で、決して強制（物理的強制によって実際に強制する場合だけでなく、イメージ的強制と言っていると思うが、教員にとっては、実際には強制しているつもりはないが、学生にとっては、強制と感じられ、圧迫感を感じる）によってコントロールしないことである。従って、初回の授業から学生1人1人に話しかけ、教壇から降りて、教室の後ろまで、学生に近づいて話かけるなど、強制あるいは強制感をできる限りなくし、楽しくコミュニケーションを取れるようにした。また、いつでも自由に何でも相談できるようにして、学生が抱えている問題を引き出し、解決するようにし、時には妥協したり、不合理な要求を受け入れたりしながら、学生と共に考えるようにした。例えば、全くの個人的な理由で、発表できなかったり、授業を欠席したりしても、相談に来た時には、なるべく相手の立場を理解するようにし、今後の頑張りを期待した。ともかく、特に若い女性というのではなく、一般論として、授業の雰囲気は極めて大事で、悪い方向に行くと、最悪の場合、授業そのものが成り立たなくなることが起きてしまう。それだけに、授業運営では、避けて通れ得ない課題であると言える。

次は、学生1人1人に対する対応を考えることである。講義形式の授業のように、教員側から一方的に教えるということではできないわけで、演習形式の授業では、学生1人1人の主体的で、積極的な関わりが核となる。そのため、1人1人の個性に合わせて対応するしかなく、全員を画一的に扱うことはできない。しかし、言葉で言うのは簡単であるが、実行するのは難しく、実際には相談に来た学生を中心に対応しただけで済ませることになってしまった。1つには、時間的な制約で全員にはできなかったことがあり、また1つには、多くの学生は自らの力で対応できると判断したことがある。ともかく、相談に来た学生には、それぞれの対応をした。例えば、人前で話すのが苦手な学生には、発表用原稿を7分間用に作成し、その原稿を聴衆を気にしないでただ読むだけにし、実際の発表の時には一声かけたりしたり、考えをまとめて、原稿を作成することができないと言う学生には、大体のスケッチ程度のメモを作成させ、発表の際には、アドリブ的に思ったことを言うようにさせたり、うまく（論理的に）話せないと言う学生には、ただ言うのではなく、資料のコピーや写真などの道具を使用して、言葉で足りない部分を補いようにさせたり、個々の学生に合わせて、対応を変えていった。

このようにして、ある一定の条件下で、どのような方法が最適かを検討したが、教員側としては、回数を増すごとに、知識と経験を重ね、技術的な進歩が見れたと実感したし、また学生側としても、慣れることによって自ら技術的進歩を十分自覚したと報告を受けたが、実際の数字として、訓練による技術的進歩が客観的に実証されるまでには至らなかった。そのことを下記の数字が示していると思われる。その数字は、クラスの履修登録者38名の発表に関する教員と学生の評価点で、発表に対する教員の評価点（5点満点）と学生の評価点（5点満点で、全学生の平均値）を左と右に書き、それを3回の発表の順番で並べたものである（0-0は欠席を示し、発表しなかったことを意味する）。

1. 0-0, 3-3.8, 0-0
2. 0-0, 4-3.8, 3-3.5
3. 4-4.2, 3-4.0, 3-4.1
4. 4-4.3, 3-4.2, 3-3.9
5. 4-4.0, 0-0, 5-4.5
6. 3-4.0, 4-4.0, 4-4.1
7. 3-4.2, 4-4.4, 3-4.4
8. 4-4.2, 3-4.0, 3-4.3
9. 3-4.3, 4-4.3, 3-4.0
10. 4-4.2, 4-3.9, 3-3.7
11. 3-4.2, 4-4.8, 4-4.9
12. 0-0, 4-4.9, 3-4.1
13. 3-3.9, 3-3.9, 3-3.5
14. 4-4.8, 4-4.9, 0-0
15. 3-3.8, 5-4.1, 5-4.2
16. 3-4.3, 3-4.0, 3-4.0
17. 3-4.1, 3-4.1, 4-3.8
18. 4-4.3, 3-4.0, 3-4.2
19. 0-0, 0-0, 0-0
20. 4-4.2, 3-4.5, 4-4.6
21. 4-4.0, 4-4.1, 4-4.0
22. 4-4.3, 2-4.0, 4-4.1
23. 4-4.3, 5-4.2, 4-4.3
24. 3-3.8, 2-3.2, 4-3.6
25. 3-4.2, 4-4.2, 4-3.9
26. 4-4.9, 4-4.9, 4-4.2
27. 3-4.1, 2-4.1, 3-4.0
28. 4-4.4, 4-4.3, 5-4.2
29. 3-4.3, 3-4.3, 3-4.1
30. 4-4.8, 3-4.5, 4-4.4
31. 4-4.0, 4-4.2, 5-4.2
32. 4-4.2, 3-4.0, 4-4.1
33. 3-4.2, 3-4.2, 4-4.3

- 34. 4-4.1, 3-3.7, 3-4.0
- 35. 4-4.0, 3-4.1, 4-4.3
- 36. 4-3.9, 4-4.2, 4-4.1
- 37. 5-4.4, 4-3.9, 4-4.3
- 38. 4-4.4, 4-4.0, 0-0

以上の数字が示すように、3回の発表の推移を見ても、少なくとも数字上で、進歩（高得点）を読みとることはできない。勿論、教員にしても、学生にしても、評価するという行為は、いつも必ず正確であると言えるようなものでない以上、進歩が数字上にはっきりと現れることはないとも考えることもできる。また、教員と学生の評価の関連性に関しては、両者の評価点がかかなり近いものもあれば、かなり離れたものもあり、具体的には、4-4.0という同一のものから2-4.1という最もかけ離れたものまであり、明確な対応関係があるとは言えないかもしれないが、全体的には、両者の点数がかかなり狭い範囲内で類似していることから、教員と学生が同様の基準で評価しており、従って発表を聞いて、それを客観的に評価するという訓練が成果をもたらしたことになるだろうし、それが発表するときに助けとなっていると言えるであろう。つまり、他人の発表を評価するという行為の訓練が、自ら発表するという行為の支援システムになっていることが明らかになったと言えるであろう。

5 最後に

実践教育の調査としては、参加者数、訓練回数、発表回数などの点から言えば、少なくともかなり限定的な成果しか期待できないように思われるが、他人の発表に対する評価行為の訓練が自らの発表行為の支援システムになるという考えでいけば、100回を越える評価行為の訓練は、予想以上の成果を期待することができると思えよう。ともかく、今回の調査結果を踏まえて、来年度のプロゼミⅡの授業に活かしていきたいと考えている。

平成22年度秋学期プロゼミⅡ
レトリック（言語表現技術論）について
跡見学園女子大学文学部コミュニケーション文化学科

日常生活においても、その他の専門的な領域においても、言語を介するコミュニケーションはすべての根底を成すものであり、生きていく上での必要不可欠な要素である。その技術を習得することは、何よりも増して、急務の課題である。

今回は、発表とレポート作成を中心に訓練を実施していく。具体的には、以下のような手順で進めていく。

- (1) 自分で文献を選択する。文献については、どのような形式でも、どのような内容のものでも、自由に選択できる。例えば、本、雑誌、新聞など、どの形式でも自由で、著書全体でも、雑誌、新聞などの掲載論文・記事でも構わないが、1つのまとまりのあるものにする。また、内容も自由で、専門的な学術的なものから、マスコミなどの報道関係のもの、趣味的なもの、日常的なものまで、どれでも構わない。
- (2) 使用文献は、比較検討という意味では、複数ある方がいいが、1つでも構わない。その文献を読み、内容を把握し、その要旨（概要、要約）をまとめ、さらに自分なりのコメントをまとめ、評価する。それを授業中に発表するために発表用の原稿を作成する。発表用原稿は、発表時間7分で発表できるようにまとめたものにするが、原稿をそのまま読むための読み原稿でも、また要点などを書き記したレジюмеでも、どちらでも構わない。発表用原稿は、使用文献の要旨と評価・コメントから成り、必ず使用文献の著書名・著者・発行所・発行年度を書くこととする。

なお、発表の際は、聴衆であるクラスの学生が納得できるような、説得力のある表現を工夫することが重要である。それは、言語だけでなく、言語以外の非言語的な手段も使用することが必要になってくる。

- (3) 発表後、クラスの意見などを聞いた上で、レポートにする。従って、発表用原稿とクラスの意見に基づいて、レポート作成を行うことになる。正式のレポート（論文）を目指して作成することを目的とし、レポートの構成・展開を考えて、自分の主張をいかに明確に表現し、相手に対して、いかに説得力のある表現にするかを考慮しながら、作成するように訓練する。それを担当教員に提出する。
- (4) 以上の（1）から（3）までの手順、つまり文献選択・発表用原稿作成・レポート作成の手順を1学期間に数回繰り返して訓練し、技術の習得を図る。
- (5) 発表を聞く側は、ただ聴いているのでは訓練にならないので、全員評価用紙を作成する。評価用紙は、発表内容の要旨を書き、さらに評価・コメントを書くことを含むものとする。そして、それとは別に、5点満点で評価点を付ける。
なお、毎授業ごとに、10名程度発表する予定でいけば、1学期間に各学生は約3回以上の発表が可能となり、良い訓練になるであろう。また、1学期間、10回の授業で、毎回10回の発表とすると、合計100回の発表となり、聞く側は、自分の発表3回を除く、97回の発表を聞き、それに関する評価用紙を作成するわけで、技術習得のための訓練としては、かなり程度の高いものになるであろう。
- (6) 発表を聞いた学生が作成する評価用紙は、発表者に渡し、それを読んで、聴衆としてのクラスの学生の意見を理解し、それを反映した形で、レポートを作成することにする。また、評

評価用紙は、発表者が読んだ後、担当教員が回収して、内容の評価をする。従って、評価用紙を作成する際は、発表者と担当教員が読んで、評価することを考慮することが大事である。

(7) 成績評価は、特別な試験などは行わず、担当教員による発表に対する評価点とレポートに対する評価点、それに加えて、学生による発表に対する評価点の合計で、総合評価をする。評価点は、それぞれ5点満点で付けることにする。

(8) 発表に対して、学生が作成する評価用紙は、いくつかの基準を設けて、評価するようにする。ただ、漠然と聞いて、曖昧な評価をしても、技術向上にはつながらないからである。評価基準としては、以下のものを挙げておく。

1. 使用文献が適切かどうかが挙げられる。人間にとって、いかに重要なものなのか？社会、国家にとって、いかに意義があるのか？環境に、どれほど大事なのか？話題性がいかにあるか？日常生活で見落としていたが、いかに大事なのか？楽しみ、笑いにとって、いかに必要なのか？

使用文献の内容が十分表現されているか、十分伝わっているかが挙げられる。

2. 発表の仕方について、言語的な側面でいえば、全体の構成・組み立て、言葉の表現性（明快な言葉遣いなのか、理解しやすい表現をしているか、十分言い尽くしているか、などなど）が挙げられ、非言語的な側面でいえば、態度、姿勢、表情、動作、声の出し方、感情移入などが挙げられる。

3. 発表の内容については、要旨がよくまとまり、完結性があるか、発表者のコメント・評価が妥当なのかが挙げられる。

以上のように、

- ①使用文献の適切性
- ②使用文献の内容の伝達性
- ③発表の言語的表現性
- ④発表の非言語的表現性
- ⑤発表内容の要旨の完結性
- ⑥発表内容のコメント・評価の妥当性

の6つの基準が挙げられる。これらの基準を使用して、総合評価として5点満点で評価点を付ける。

(9) プロゼミⅡでは、言語表現技術のより実践的で、具体的な訓練による技術習得が目的で、理論的考察・説明、講義形式の進行は行わないことにする。従って、学生諸君の主体的で、積極的な関わりが重要になってくる。

なお、言語表現に関して、質問・疑問があれば、いつでも相談してください。

プロゼミⅡ 評価用紙

日付： 学籍番号： 氏名：

(1) 発表者氏名と発表タイトル

(:)

総合評価点 ()

個別評価点：文献適切性 () 文献内容伝達性 () 言語的表現性 ()

非言語的表現性 () 要旨完結性 () コメント妥当性 ()

(2) 発表者氏名と発表タイトル

(:)

総合評価点 ()

個別評価点：文献適切性 () 文献内容伝達性 () 言語的表現性 ()

非言語的表現性 () 要旨完結性 () コメント妥当性 ()

(3) 発表者氏名と発表タイトル

(:)

総合評価点 ()

個別評価点：文献適切性 () 文献内容伝達性 () 言語的表現性 ()

非言語的表現性 () 要旨完結性 () コメント妥当性 ()

(4) 発表者氏名と発表タイトル

(:)

総合評価点 ()

個別評価点：文献適切性 () 文献内容伝達性 () 言語的表現性 ()

非言語的表現性 () 要旨完結性 () コメント妥当性 ()

(5) 発表者氏名と発表タイトル

(:)

総合評価点 ()

個別評価点：文献適切性 () 文献内容伝達性 () 言語的表現性 ()

非言語的表現性 () 要旨完結性 () コメント妥当性 ()

(6) 発表者氏名と発表タイトル

(:)

総合評価点 ()

個別評価点：文献適切性 () 文献内容伝達性 () 言語的表現性 ()

非言語的表現性 () 要旨完結性 () コメント妥当性 ()

(7) 発表者氏名と発表タイトル

(:)

総合評価点 ()

個別評価点：文献適切性 () 文献内容伝達性 () 言語的表現性 ()

非言語的表現性 () 要旨完結性 () コメント妥当性 ()

平成22年度秋学期プロゼミⅡ（日付： 学生番号： 氏名： ）

発表者氏名と発表タイトル：

発表内容の要旨：

発表内容の評価・コメント：

発表者氏名と発表タイトル：

発表内容の要旨：

発表内容の評価・コメント：

発表者氏名と発表タイトル：

発表内容の要旨：

発表内容の評価・コメント：

発表者氏名と発表タイトル：

発表内容の要旨：

発表内容の評価・コメント：

発表者氏名と発表タイトル

発表内容の要旨：

発表内容の評価・コメント：